

： 卷 頭 言 ：

万葉集—植物が詠い込まれた歌—を楽しむ



宇都宮大学 名誉教授 竹内安智

『万葉集』は日本最古の国民的和歌集で、7世紀後半から8世紀後半頃の律令国家成立前後の瑞々しい息吹に溢れた時代の歌、4,516首が収録されている。そのうちの1/3に植物が登場する。ほとんどがどこの里地・里山でも普通に見られもので、種類数では160位である。植物が、歌の大半を占める相聞歌（男女の思いを伝え合う歌）のなかに見事に詠い込まれている。食物、衣服、燃料にと生活のあらゆる場面で利用されていて身近な存在だったのであろう。

さて、万葉集への関心と想像は脳の活性化に役立つと言う。ここに植物が登場する歌、数首を紹介したい。

万葉集の冒頭を飾る歌は驚くことに求愛の歌である。雄略天皇が山菜を摘む娘に詠いかける。

「籠(こ)もよ み籠もち ふくしもよ みぶくしもち この丘に菜摘ます児(こ) 家告(の)らさね 名告らさね そらみつ大和の国はおしなべて吾こそ居れ」(意味:様々な道具を持って丘に菜を摘む娘さん!家はどこか。名前は何か。私は大和一带を治める者だ。) この歌は後半の「統一国家の大王としての君臨を宣言する雄叫び」の比重の方が大きいとも言われる。

農耕地雑草が詠われた首数は少ない。農に直接関わった詠み人が少ないか、正確な雑草名も知らなかったのかも知れない。

「打つ田にも稗は数多ありといえど擇(え)らえし我ぞ夜を一人寝る」(詠み人:柿本人麻呂 意味:水田には沢山の稗が生えているように男は沢山いるのに、自分だけが抜き取られて寂しく独り寝をしている。) 直撒きもされており、稗はイネに負けないほどの数が生えていたのであろう。

「思ふ人來むと知りせば八重むぐら(ヤエムグラ) 覆へる庭に玉敷かましを」(意味:思う人が

来るのを前もって知っていれば、屋敷内の雑草を取って綺麗にしておいたのに。) 万葉人も雑草が生えていると、むさ苦しく恥ずかしいと思っていたのである。潔癖性も伺える。

「月草の借れる命にある人をいかに知りてか後も逢はむといふ」(意味:ツユクサの花が一日花であるように儂私達の命なのに、どうして後で逢いましょうと言うのですか。) 殆どの人は植物をよく観察していたので、ツユクサが1日花ということに気づいていたであろう。

「道の辺の尾花(ススキ)が下の思ひ草今さらになど物か思はむ」(意味:思ひ草が道端のススキを頼りにしているように、私もあなただけが頼りです。決して他の人のことなど考えません。) 詠み人は思ひ草(ナンバンギセル)がススキに対して根寄生の全寄生性であることを見抜いていた。

「この里は継ぎて霜や置く夏の野に我が見し草は黄葉(もみ)ちたりけり」(詠み人:孝謙天皇 意味:夏なのに、この里に霜が降りたのだろうか。私が見た草が黄色に色づいていた。) 澤蘭(サワヒヨドリかヒヨドリバナ)がジェミニウイルスに冒され夏に黄化症状を呈していると詠んだ。植物ウイルスに関する世界最古の記録であるとして、かつてネイチャー誌に紹介された。前の歌とともに正にサイエンティストとしての観察眼を伺える。

私は、植物の有りように自分の想いをなぞらえて歌にする、万葉人の洗練された表現力に深く感銘を受ける。万葉集を楽しみ、そして当時の建造物、衣服、文物などを想い浮かべる時、周辺国に比べて見劣りしない当時の文化、文明はただ導入したものだけの所産ではなく、彼らの独特の感性と能力の基盤の上に成立したものであろうとの思いを強くする。